学校現場から悲鳴が聞こえる

第12回 「女性が働くなかで感じたこと」

前号では保育士から保育に関わる悩みや課題を聞きましたが、同時に働く女性の立場から見ると、我が子の子育てや職場内でのハンディキャップや壁を感じることも多々あるようです。

「男女共同参画社会基本法」が公布、施行され１６年が経ちます。同基本法の第２条では次のように記しています。

「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」と謳っています。

しかし、子育てをはじめ、現実的にはまだまだ女性に多くの負担がかかっていることも事実です。今回は高校に勤めるお二人の女性に思いを語っていただきました。

大変だった初任のころ

Ｏさん「初任校は１０数年ぶりとなる女性教員の着任でした。普通科と職業科があり、今では考えられないほどのツッパリ男子もいました。２２歳の私と４歳しか違わない男子生徒たちです。口に出すのも辛いものがありますが、授業はほとんど成り立ちませんでした。私が男性教員で身体も大きければ・・・と思いましたが叶わぬ事。スカートをめくられたり、教科書を投げつけられたり、卑猥な言葉をかけられたりと、毎回教室に入るのに勇気がいりました。」

記者「テレビドラマさながらの様子がいきなり出されました。３０年ほど前ということですが、その男子たちもどんな大人になっているでしょうね。初任校後はどうでしたか。」

「なんだ、また産むんかい」

Ｏさん「２校目では在任中に３人の子どもを産みました。産休、育休があり、実質は１０年足らずの勤務でしたが、二人目の子どもを妊娠した時、校長に報告に行くと『なんだ、また産むんかい』と、嫌な顔をされたことを今でも覚えています。今ならマタハラですね。子どもを産み育てながらの仕事はいつも周りの人に気を遣い、『申し訳ありません』と頭を下げながら、綱渡りの連続でした。その上、二人目の子どもは１歳の時に頭蓋骨を切断するほどの難病にかかり、夫婦して有給休暇の取得を工夫して看護するということが続きました。義母からは『子どもがこんな大変な思いをしているのに、何故仕事をやめないの』と何度も言われました。叔母や母からも同じようなことを言われましたが、義父と夫は『仕事は辞めない方がいい、できるだけ協力するから』と言われ、救われました。」

記者「辞めなくて良かったですね。３人の子育て、そして教員としての仕事、夫婦共働きの家庭として子どもの成長とともに大変さも増していきますね。」

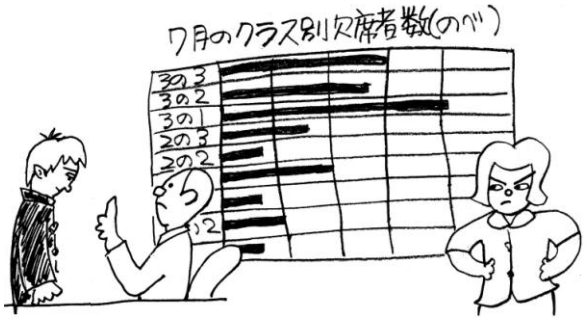
子育て、母の介護

Ｏさん「長男の小学校入学前に、学童保育が校区の中に立ち上がり、３人目の子の産休、育休では仕事を辞めずに、長男は幸い学童保育にお世話になることができました。その後、自らが学童保育の保護者会長にもなり、更に、新たな学童保育の施設をつくる運動など、大変なことがありました。また、子育てが一段落した後は、今度は義母が認知症になり、同居での介護が始まりました。ちょっと目を離すとどこかへ行ってしまい、警察のお世話にもなりました。女性が仕事をしながら、結婚、

育児、介護が無理なくできるような社会になる日はほど遠いと実感しています。」

Ｐさん「２０年程前の教員になりたての頃は、セクハラはありました。年々、女性に対する差別は無くなっているように思います。世の男性が草食系になったように、教員の男性も草食系になってしまったのかな？５０代後半の人のほうが女性教員に差別的ですね。」

記者「Ｐさんには担任としての苦労もあるようですので、そのところを話していただけますか。」



あまりにも多い担任の業務

Ｐさん「今回のテーマからそれるかもしれませんが、担任をしている現状を話したいと思います。私の学校では朝と帰りの教室で配るプリントが、多い日は５種類くらいあります。そのほとんどが生徒の机の中にあり、カオス状態（秩序のない状態）です。頭の中もそうなっているのではないかと心配です。学校評価アンケートやいじめ、悩み相談など、保護者のサインをもらって全員回収という指示が出ると、担任団はため息をつく始末です。なぜなら容易なことではなく、回収に２週間はかかります。それでもダメな場合もあり、学年主任は担任に催促をしてきます。『毎日連絡して、催促しましたか』『はい、しました』『出さない人には名前を書いてもう一度配って下さい』『もちろんしました』『これから毎日やって下さい。教室に未提出者の名前を貼って下さい。職員室にも未提出クラス名を貼ります。』こんな感じです。まるで取り立て屋です。これが毎日なので、忙しい業務に加えボディにジャブをくらったようにきいてきます。」

記者「私の現役時代も雨具点検、自転車の整備不良が改善されたかの報告など、生徒全員から回収するのに何週間もかかるようなことがありましたね。」

欠席数グラフで無言の圧力

Ｐさん「私の学年には欠席の連絡をしてこない家庭が４人います。何故かと言えば、親が子どもより先に仕事で家を出るので欠席を知りません。親は当然登校したと思っているのですから。生徒の携帯に連絡すると『身体の具合が悪くなって、親には連絡してもらえなかった。』こんなウソが年間１０日以上あります。それから毎月、欠席数がグラフになって管理職が職員室に貼り出します。担任はどんな指導をしているのか？と無言の圧力を受け、担任はみんな悲しい思いをしています。いわゆるサボり癖の生徒がいました。どうにかして進級とこの１年半、さまざまなことをしてきました。朝、６時３０分にモーニングコール、それでもダメなら７時１５分に迎えに行く。『バス代がないから』と言われれば時間休をとって迎えに行きました。親は家に帰らない日も多く、仕事を掛け持ちして生きるのに必死で、子どもどころではないようでした。先日、１時間も玄関前で待っても来ません。この時悟りました。『私にはこの生徒は救えない』と。生徒が卒業したいと言ったから、力になろうと努力しましたが限界です。自分の思い上がりが本当に嫌になりました。職場には遅刻するし、おまけに風邪を引きました。遅刻しそうになり、教頭に連絡しましたが、『お疲れ様』の一言もありません。結局、生徒は法定時数オーバーになりました。」

記者「人の見えないところでの苦労が成果となって表れず、やりきれませんね。県教委は人事評価による給与査定の本格実施をすすめようとしていると聞きますが、こうした実態をどう把握しているのか、問題が多いようですね。」